



## はじめに

禅文化歴史博物館では、2019年度に秋田県の曹洞宗寺院である陽田寺旧蔵資料 547 点を受贈し、2020年度に資料の整理作業を行ないました。書籍(禅籍)類 110 点と、紙型類 437 点からなるこれらの資料は、近代における出版活動や駒澤大学(曹洞宗大学)にとって、大変関わりの深い資料であることがわかりました。

新規受贈資料「飯塚禅應・哲英師関係資料」と当館所蔵の印刷関係資料を通じて近代における曹洞宗の出版活動を紹介します。当時の印刷技術やそれをめぐる人物たちの活動に興味をもっていただけると幸いです。

## 明治時代の印刷と駒澤大学

1875(明治8)年、現在の駒澤大学の前身にあたる曹洞宗専門学本校が開校され、1882年には曹洞宗大学林専門(学)本校が麻布区北日ヶ窪に独立した校地を以って開校します。明治初期にはすでに活版印刷の技術はありましたが、複雑(特殊)な文字が多く使用されている仏教書などは、依然として木版印刷が主流でした。大学で使用されていた教科書も木版印刷のものでした。



写真上：『正法眼蔵辯註』とその版木  
 写真下左：『首書傍訓伝光録』  
 写真下右：『参同契註』版木

(すべて当館蔵)

## 大内青巒と活版印刷

大内青巒は、明治・大正期における仏教学者・思想家です。曹洞宗大学林専門学校で総監を務めた原坦山のもとで禅を学びました。現在の大日本印刷株式会社の前身のひとつである秀英舎や出版社鴻盟社を設立しました。当時、普及が広まって間もない活版印刷を用いて、一般向けに仏教書を分かりやすく説明した書籍などを出版しました。

また、曹洞宗の在家向けの経典である『曹洞教會修証義』の土台となった『洞上在家修証義』を編集するなど仏教の大衆化に努めました。晩年には東洋大学学長も務めました。



大内青巒  
(おおうちせいらん)



写真左：『曹洞教會修証義』紙型（当館蔵）  
写真右：秀英舎本舎工場（明治28年）  
（大日本印刷株式会社提供）



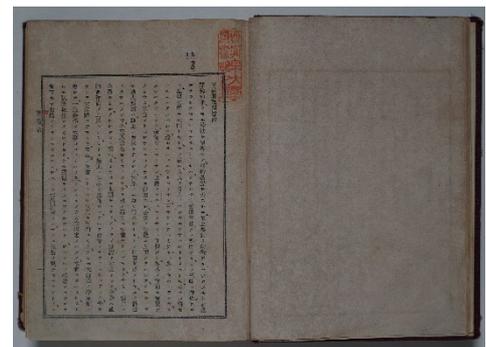
## 木版印刷と活版印刷

明治中期頃から次第に、印刷方法の主流は木版印刷から活版印刷に変化していきます。活版印刷により活字は小型化し、紙一枚あたりの文字数が増加しました。また、和紙の片面印刷だったものが洋紙の両面印刷となり、同じ情報量の冊子が以前より薄く製本され、書籍の省資源化・廉価化が実現しました。

例えば、『正法眼蔵』は木版印刷の本山（永平寺）版は、全21冊（目次・凡例の1冊を含む）であったのに対し、1885（明治18）年に秀英舎が活版印刷の技術を用いて出版した（発行：鴻盟社）ものでは1冊にまとめられました。

また活版印刷が主流になると版の保存のために紙型が用いられるようになりました。紙型は、紙なので軽く、かさばらないので、保存にはうってつけで、再版も容易に行えました。

写真上：『正法眼蔵』（秀英舎印刷版）  
写真下：『彫刻永平正法眼蔵』（永平寺（本山）版）  
（どちらも本学図書館蔵）



## 大正・昭和戦前期の印刷技術

### —中央仏教社と飯塚哲英—

飯塚哲英は、1915(大正4)年に曹洞宗大学を卒業し、1917年に出版社の中央仏教社を立ち上げます。『中央仏教』や『大乘禅』といった雑誌や仏教・禅に関する書籍を多数編集・発行しました。自身も「飯塚夢袋」名義で著書を出しています。また、飯塚哲英は雑誌『家庭の友』や児童向けの書籍を発行した金の鳥社を立ち上げるなど、仏教を一般に広める出版活動も行なっていました。中央仏教社などの出版物には、当時の駒澤大学の教職員や卒業生が深く関わっていました。



飯塚哲英  
(いづかてつえい)



### 戦火を免れた紙型

1945(昭和20)年8月発行『大乘禅』22巻2号を見ると、中央仏教社は空襲による火災で全焼し、出版物や道具類も全て焼失してしまったことが書かれています。

当時の被災の記録をまとめた『東京都戦災誌』を見ると中央仏教社が所在していた東京都牛込区矢来町(現東京都新宿区)に大きな被害があったのは、3月10日に起こった、東京大空襲によるものと推測されます。また、幸いにも「読者台帳と出版物の紙型は烏有を免れ」とあり、紙型に関しては被害を免れたようです。

つまり、今回寄贈いただいた紙型は、東京大空襲による火災から奇跡的に免れて伝わってきた資料なのです。

### 中央仏教社と駒澤大学

中央仏教社の主要雑誌である『大乘禅』は、飯塚哲英の在学時代の恩師である元仏教学部教授(当時)の原田祖岳に勧められて創刊されました。原田祖岳は『大乘禅』に毎号寄稿をすることを約束し、『大乘禅』の記事をもとに、さまざまな書籍が中央仏教社から発行されることとなりました。

そのほかにも、初代学長の忽滑谷快天など教職員や卒業生などが『大乘禅』に寄稿していました。

飯塚哲英が亡くなった後も、『大乘禅』をはじめとして、中央仏教社の出版事業は引き継がれていきます。『大乘禅』は、2008(平成20)年の通巻996号まで確認できます。



写真上：資料受け入れ当初の状態  
写真下左：『修証義講話』紙型  
(当館蔵)

写真下右：原田祖岳



## —活版印刷の工程—

日本で本格的な活版印刷がはじまっていくのは、明治の初めのことです。活版印刷とは、活字（銅・鉛・木など）を組んでつくった版で印刷すること、または印刷したもののことです。この活版印刷は、大きくわけて①文字を造る②文字を拾う③文字を組む④文字や絵を刷る⑤本を綴じるといった作業工程がありました。

### ①文字を造る—活字鑄造—

まず、彫刻師が手彫りした「種字」から活字を鑄造する型である「母型」を製造します。この「母型」を鑄造機にセットし、鉛等を流しこんで活字をつくりました。



<鑄造機>



<母型>

### ②文字を拾う—文選（ぶんせん）—

原稿をもとに、文選箱を持ちながら、活字棚から活字を拾います。

### ③文字を組む—植字（ちよくじ）—

集められた活字をもとに、版をつくりあげていく組版という作業です。組まれた版は、バラバラにならないようにタコ糸で周囲を固定します。



<活字棚>

### ④文字や絵を刷る—印刷—

植字の作業ののち、校正と修正を経て、印刷を行ないます。印刷が終わった版は、崩してバラバラにしますが、紙型から鉛版を製作し、再版に使用しました。

### ⑤本を綴じる—製本—

印刷が終わったら、紙の束を本のかたちにしていく製本作業を行ないます。



<鉛版>

以上が、活版印刷の工程です。作業は分業化され、それぞれ熟練の工人たちが担当しました。

※写真はすべて、大日本印刷株式会社提供。